慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカの社会言語学・社会言語学のアメリカ
Sub Title	American sociolinguistics in the late 20th century
Author	井上, 逸兵(Inoue, Ippei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.41- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	巽孝之教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカの社会言語学・社会言語学のアメリカ

井上　逸兵

序

20世紀はアメリカの世紀とも言われるが、特に世紀後半において言語学の世界を大きく展開させたのもやはりアメリカだった。Noam Chomskyの生成文法が「革命」と呼ばれるまでのインパクトを与えたのは1957年。その対極とも言える社会言語学もそれに呼応するかのごとく1960年代に鼓動を打ち始める。

アメリカの社会言語学の始まりをどことするかにはいくつかの見方ができるが、*Oxford English Dictionary*に‘socio-linguistics’がはじめて登場するのは1939年のことである。ただこの出所は、ケンブリッジ大学のThomas Callan Hodson（イギリス流にいう社会人類学者）の*Man in India*である。OEDの次の例は1951年で、こちらはアメリカの言語学者Einar Haugenの*Language*誌に投稿された論文からのものだ。

ちなみに、上二つの引用における「社会言語学」はsocio-linguisticsというハイフン付きである。当時、言語学の分派がはじまっていたが、hyphenated linguistics（ハイフン付き言語学）はまだ蔑称だったと言ってよい（それはまだ払拭しきれているか疑問だが）。

ところで、日本の場合、社会言語学とよびうる言語論はもっと古くからある（井上 2017）。社会の縮図である二人の会話において、相手が誰であるかによって話し方やことばを変えるなどということは、日本語話者にとってはごく当たり前のことであって、欧米の言語学者の気づきは日本の言語学者にとっては今さら感があったろう。本格的なアメリカの社会言語学の営みは1960年代にはじまる

が、そのような素朴な気づきからはじまったとも言える。1957年のチョムスキー革命のアンチテーゼとしての性格を帯びつつも、アメリカの社会の状況を反映させながらアメリカの社会言語学は展開していく。

本稿では、20世紀後半、特に1960年代から70年代にかけてのアメリカの社会言語学の潮流を、その直接間接の背景となるアメリカ社会の状況との関わりで論じてみたい。

アメリカの社会言語学の夜明け

アメリカの社会言語学のはじまりを告げる論考のうち二つを取りあえげよう。もっともミクロな社会は対人コミュニケーションにあると考えられるが、呼称は英語やヨーロッパの多くの言語において、もっとも明示化意識化しやすいミクロな言語現象だ。

Brown and Gilman (1960) は、フランス語、イタリア語、ドイツ語における呼びかけの代名詞（the pronouns of address）の意味の歴史を辿り、社会構造、集団イデオロギーなどとの関連を論じている。二人称代名詞の権力的意味のレベルの使用から連帯的意味のレベルの使用への移行がどのように行われてきたかを実証しようとしたものだ。また、それがどのように話者の階級的地位や政治的見解、さらには意識や態度と関わるのかを考察している。

この論考は現在の社会言語学からすると、かなり思弁的と言われかねない議論もあり、科学的な実証の次元には至っていない部分もある。しかし、二人称代名詞というミクロの問題を議論の俎上にあげたアメリカ、およびヨーロッパ系の言語に関わる社会言語学の古典の一つとなっている。

同じ時期に、Brown and Ford (1961) は、話し手と聞き手の関係が言語形式の選択を決定づけるという事象に着眼した。アメリカ英語における（forms of address・ファーストネーム、ラストネーム、敬称、およびその組み合わせ）が話者間の関係によって支配される様相を論じた。意味分析を社会構造に適用した研究としてこれまたアメリカの社会言語学の基礎となっている。

1960年代初頭のこれら二つの社会言語学の基本文献は、すでに迎えつつあったアメリカの変動の時代のはじまりを告げるというよりも、むしろその静かな前夜の象徴と見るべきだろう。このあと、アメリカは非主流とされていた人々が

様々なところで声を上げる時代を迎えていくし、公民権運動のきっかけとなったRosa Parks「バス・ボイコット事件」は1955年だが、一方で、白人中流階級にとっての安定と繁栄の時代といわれる1950年代のアメリカ社会がこれらの研究の背景あるように思われる。いわば、一般に言うところの安定の時代から変動の時代への境界にアメリカの社会言語学のはじまりがあったのだ。

アメリカの社会言語学の二人の巨人

20世後半はアメリカの社会言語学、そして世界の社会言語学が大きく展開するが、その基礎が築かれるのが1960年代だった。

アメリカの社会言語学の巨頭として、William Labov (1927-）の名をあげないわけにはいかない。Labovの変異理論（variation theory）は、紙幅の都合で最後に少しだけふれることになるもう一人の巨頭Gumperzの相互行為の社会言語学（interactional sociolinguistics）とともに、その後の社会言語学の大きな流れを生み出すことになる。彼らの研究の基礎は1960年代に育まれたと言える。Labovを世に知らしめた「デビュー作」である、マサチューセッツ州Martha's Vineyard島の社会方言を扱った論文は、彼の修士論文である。GumperzはDell Hymes (1927-2009)の言語人類学（linguistic anthropology）を受け継ぎ、スピーチコミュニティ（speech community）におけるパラ言語を含めた言語慣習に研究の目を向ける流れを作り出した。Labovがペンシルベニア大学、Gumperzがカリフォルニア大学バークリー校と研究拠点が東西に分かれていたのも何やら象徴的だ。

Labovの変異理論が描いたアメリカ

本稿では紙幅の限りがあるので、Labovの論考を主としてとりあげることにする。Labovの創始した変異理論は、社会学、人類学、統計学などの手法を組み合わせ、自然の文脈に現れた、一見不安定な言語形式と機能との関係や構造の相対的な出現頻度や共起のパターンを発見しようとするものである。このアプローチでは、当該のスピーチコミュニティに入り、親密な状況やカジュアルな状況での自然な（vernacular）発話にアクセスすることを重要視する。それこそが話者が獲得した言語の最も体系的な形を反映したものと考えるからである。

変異理論の社会言語学の概要と比較的近年の評価についてはChambers, Trudgill, and Schilling-Estes (2002)やBayley and Lucas (2007)にある。ここでは、もっともよく知られたニューヨーク市の母音後（postvocalic）の/r/（以下、pv-/r/）の研究をとりあげて見よう。さらに、それにつらなるアメリカにおける標準英語（Standard English）をめぐる議論を通して、それらの背景にあるアメリカ社会について考えてみたい。

Labov (1966)は、ニューヨークにおけるpv-/r/の発話出現を社会的階層の観点から調査分析したものである。音韻変数pv-/r/は、発音されるか、省略されるかのどちらかで、第二次世界大戦前までのニューヨーク市の人々は一般にpv-/r/を使わない、つまり非ロティックなアクセントを発話していた。これは、19世紀初頭にイギリスが設定した国際英語（International English）のモデルに準拠していたと考えられている。WNET（PBS系）が制作したドキュメンタリー*Do You Speak American?*の中でLabov自身が解説しているが、Franklin Delano Roosevelt (1882-1945）の演説も/r/なし（r-less）であったことにも象徴される。しかし、第二次大戦後、この音韻特徴に対する一般的な態度はむしろ否定的に反転した。pv-/r/がニューヨークの発話にいわば再導入されたのである。そして、Labovは1960年代の調査においてニューヨーク市ではpv-/r/の使用頻度は話し手の特定の社会経済的地位、社会階級と相関していることを発見した。

Labovはニューヨーク市マンハッタンの3つの階層のデパートを調査の対象とし、従業員は発話を客層に適応させるという前提理論に基づきその従業員のスピーチを分析した。3つのデパートは、Saks Fifth Avenue（高級）、Macy's（中流）、S. Klein（主に労働者階級）である。Labovは科学的な手法をとる一方で、創意に富んだ着想にすぐれていた。いうなればアイディアマンでもあった。

この3つのデパートの従業員によるpv- /r/の発音を調査するために、Labovは従業員の発話の中から目的の音韻特徴を含む語彙項目（'fourth floor'）を引き出すような質問をした。しかも、変装をして何度も調査に赴いたという。あらかじめ４階に何が売られているかを調べておき、たとえば、"Where are women's shoes?"と店員にたずねる。そうすれば、店員は"Fou*r*th floo*r*"と答えるはずなので、pv- /r/が２度出現するチャンスがある。これを聞き取るわけである。

Labovのアイディアマンぶりはこれにとどまらない。ここからがさらに重要なのだが、このやりとりの後に、Labovは聞き取れなかったふりをして、"Excuse

me?” などと言って聞き直すのである。さらに “Fou*r*th floo*r*” と答えることでpv-/r/の出現チャンスが２度増えるばかりでなく、聞き取ってもらえなかった場合、２度目に発音するときにはより明瞭に、大きな声で発音するという人の行動傾向（というより善意か）を利用したわけである。理論的にもこのことの意義は大きい。人は意識した発音をするときにはより「正しい」と思っている発音（威信（prestige））に向かう傾向があるからである。

結果として、ニューヨーク市の人々のpv-/r/が階級によって層化されていることが示された。社会経済的地位の高い人は、社会経済的地位の低い人に比べて/r/を発音する頻度が高いことがわかった。Saks Fifth Avenue ＞ Macy’s ＞ S. Kleinの順で、pv-/r/の発音頻度が高かったのである。このことは当時のニューヨーク市においてpv-/r/に威信があることを意味した。

より重要なのはここからだ。興味深いことに、１回目の質問の２度のpv-/r/にくらべて、2回目は中流Macy’sのpv-/r/の頻度が、高級Saks Fifth Avenueの頻度に肉薄したのである。Labovの分析によれば、より自らの発音に意識的になる２回目の発音で威信に向かうことは、その階層の人々のいわゆる上昇志向の反映と考えられる。つまり、下層と上層については変化への希求が比較的低いが、中層の人々は、自分の社会的経済的地位の向上を潜在的顕在的に意識する傾向があり、それがこのようにミクロな言語行動に表れるということなのである。単純に言語変化を考えるならば、つねに親の世代と同じことばづかいをし、きのうとおなじことばを話していれば言語変化は起こりにくいはずだ。しかし、変化は言語において常である。Labovのこの研究は、いったい誰が言語変化を起こしているかという問いに対する一つの答えだ。その「犯人」はざっくりいったところの中層の人々なのである。

アメリカの標準英語

ところで、ニューヨーク市の言語変種はけっしてアメリカの標準とはされていない。これにはアメリカ固有の問題が背後にある。以下では、Bonfiglio (2002)の論考を見てみよう（小山 (2017) も参照のこと）。

20世紀前半には、アメリカ人は中西部や西部のアクセントを、発音の基準となるGeneral American (English)として捉え始めていた。アメリカにおける標準

化のプロセスは他国の標準化とは全く異なっていた。一般的に、国の標準語は、その国の経済的・文化的中心でもある言論圏の発音をモデルにする。大部分が農村部である（中）西部にこれを求めるというようなアメリカの例は非常に珍しい。

20世紀への変わり目、ニューヨークは明らかにアメリカ経済の中心であった。人口100万人以上の都市が他に2つしかなかった時代に、ニューヨークは400万人近くの大都市であり、アメリカの文化の中心でもあった。ボストンと並んで北東部の権力の中心でもあり、当時アメリカで最も影響力のあった地域であったことは明らかである。当時のこの地域の最も特徴的な音韻特徴は、pv-/r/が顕著に少ないということだった。ニューヨークやニューイングランドの上流の発音は、20世紀前半のアメリカの役者の発音に強く影響を与えていた。この発音は一般的にpv-/r/をschwa（強勢のないあいまい母音）に置き換えたもので、俳優Katharine Hepburnの発音は、このタイプの発音の代表例である。この発音はラジオ劇の発音でもあったが、最終的にはラジオ放送用の発音になった。

ラジオの発達と重なるこの時期は、アメリカ合衆国移民局がおかれるニューヨークEllis島を1,200万人の移民が通過した時期でもある（1892年～1924年）。この移民のほとんどは、南ヨーロッパと東ヨーロッパからの移民で、1907年には、移民の75％がこれらの地域からの移民だった。1910年までには、ニューヨークとボストンの人口の75％が移民または移民の子供で構成されていた。この状況は1921年と1924年の移民割当法（Immigration Quota Act）制定時あたりに頂点達する。その結果、ニューヨーク、ボストンといった文化的経済的な大都市はアメリカの「純粋さ」を汚染する源とみなされるようになった。特にニューヨークは、230万人の東欧系ユダヤ人の移民をかかえ、外国人恐怖症的（xenophobic）、あるいは反ユダヤ主義的（antisemitic）な時流を生み出す。その動きの影響を受けて、アメリカ人は「より純粋な」地域の発音に惹かれ、（中）西部のスピーチパターンが好ましい規範として採用されていったという。

アメリカの人種問題と言語変種

反移民的感情は、アメリカ合衆国の場合、しばしばことばの問題として顕在化する。公的には人種差別の表明がタブーとなっているアメリカ社会では、「隠れ」

人種差別主義者は、問題をことばに置き換えて運動を展開する。1996-1997年のエボニクス論争ではアフリカ系の人たちを非難せず、アフリカ系英語の問題としてそれを批判した。英語公用語化運動であるEnglish Onlyの論法は、ヒスパニックの人々を非難するのではなく、スペイン語を話すこと、スペイン語しか話せないことを問題視するものだった。つまり、アメリカでは人種問題は言語問題として語られており、このことは、先述したアメリカにおける標準英語の問題が、（中）西部といった地域的なカテゴリーに置き換えられることと重なりあう（小山 2017）。

メディアやエンタテインメントにおいて起こっていることもパラレルに考えられる。Lippi-Green (1997) は、映画はキャラクターを描くための手段としてしばしば社会的に類型化されたイメージを利用することを指摘しつつ、言語的マイノリティが差別される問題を指摘している。ディズニーのアニメ映画に関する彼女の研究では、標準的でないアクセントは悪役や身分の低いキャラクターにあてられ、主人公には、ヨーロッパ系でない場合も含めて主流のアクセントが与えられることを論じている（例：*Aladdin*（Androutsopoulos (2007)）。

ちなみに、興味深いことに、*Lion King*や*Tarzan*などでは、イギリスの容認発音 (Received Pronunciation）が悪役に回されている。RPがイギリスのブルジョワや学歴貴族などの上層階級の「傲慢さ」、「排他性」などの否定的な特性と結びつけられているからだと考えられる（Mugglestone (2003)、小山（2017））。

アメリカ社会にコミットする社会言語学

本論では詳述する紙幅はないが、1970年代、80年代の社会言語学にはアメリカの言語状況と社会状況に敏感にかつ、能動的に関わってきたものが多い。

先に巨頭の一人と称したGumperzのコンテクスト化（contextualization）の研究プログラムは（Gumperz 1982）、アメリカという文脈でみるならば、共通の言語であるはずの英語が、異なった解釈の枠組みをもち、異なったコンテクスト化の慣習を持つもの同士では、十分に相互理解の媒介になっていない状況を分析するものである。とりわけ母語の異なる英語話者同士ではミスコミュニケーションは日常と捉えられ、彼の研究群はいわゆる異文化コミュニケーションの社会言語学的アプローチと言ってもいいだろう。

Lakoff（1975）は、アメリカの女性の関わる言語表現から、男性中心である経済と権力の中枢から女性が遠ざけられているさまを論じたものだ。彼女のこの論考は元々生成意味論と呼ばれる、チョムスキー的な枠組みにありつつ、生成文法の過度な統語論偏重へ反旗を翻す議論として意図されていたと考えられるが、1970年代の女性解放運動のうねりに飲み込まれていくことになる。社会言語学と意図されていなかったものが、むしろ社会言語学の中心的議論に担ぎ上げられることになった。

おわりに

1960年代から70年代は、社会言語学がもっともアクティブにアメリカ社会と関わりをもった時代だった。これらの研究群は、アメリカ固有の問題を論じつつも、いわばアメリカを介した普遍性をも同時に探究するものだ。アメリカはこの時代の社会言語学の主戦場だったと言ってよい。この後、アメリカも世界も、インターネットとグローバル化の時代を迎える。その時代前夜の社会言語学の縮約形がアメリカにあったと言えよう。

References

Androutsopoulos, J. 2007. Bilingualism in the Mass Media and on the Internet. In Monica Heller (ed.) *Bilinguialism: A Social Approach*. Palgrave Macmillan, pp. 207-230.

Bayley, R. and Lucas, C. (2007) *Sociolinguistic Variation: Theories, Methods, and Applications*. Cambridge University Press.

Brown, R. and Gilman, A. 1960. The Pronouns of Power and Solidarity. In Sebeok, T. A. (ed.), *Style in Language*, pp. 253-276. MIT Press.

Brown, R. and Ford, M. 1961. Address in American English. *Journal of Abnormal and Social Psychology* 62, pp. 375-85.

Chambers, J., Trudgill, P. and Schilling-Estes, N. (2002) *The Handbook of Language Variation and Change*. Blackwell.

Gumperz, J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge University Press.

井上逸兵（編）2017.『社会言語学』（朝倉書店）

小山亘 2017.「社会語用論」井上逸兵編、pp. 125-145.

Lakoff, R. 1975. *Language and Women's Place*. Harper & Row.

Labov, W. (1966). *The Social Stratification of English in New York City*. Center for Applied Linguistics.

Lippi-Green, R. 1997. *English with an Accent: Language, Ideology, and Discrimination in the United States*. Routledge.

Mugglestone, L. (2003) *"Talking Proper": The Rise of Accent as Social Symbol* (2nd edition). Oxford University Press.